序

「発見学習の展開」と題して研究にとりくんでから、四か年の歳月を経過した。　発見学習とは何か、という理論的なことからはじまり、発見の対象を中心にした教材内容の構造化に目をむけながら、わたしたちの研究活動の本命とも考えられる方法面の研究をすすめてきた。いわゆる内容と方法の統一を深めたわけである。その結果、一応のまとまりをつける意味で、昭和47年10月、水越敏行先生との共著による「発見学習の展開」全五冊を、明治図書の好意により出版を行なった。出版と同時に各方面からのきびしい批判や、激励をいただき、今さらながら反響の大きかったことにおどろいているしだいである。

わたくしたちは、ただ、ひたすらに行なってきた研究のあしあとを、静かに反省し、各方面からのご意見を謙虚に受け入れ、今後の研究の視点をどこにおくべきかについて討論を重ねた。その結果

まず第一にあがったのは、今までの研究は、発見学習の基礎的な理解に重点がおかれ、子どもたちに対し「どのように学ばせるか」といった教師側にたって、研究を考える面が強すぎたのではなかったかということである。したがって学習指導の計画や、指導の流れの中に、学習の主体者である子ども自身の認知の過程を、十分反映していなかったのではなかろうかという反省がわいてきたのである。

こうした反省の上にたって、発見学習の真実の姿は、教師の側よりも、むしろ子どもの側にたって、実態から逆に教材の構成や、過程の組みたてを見なおすことこそたいせつなことであろうと考えた。

以上のような考えを本年度の研究視点として、授業研究を進めてきたが、子どもの活動の変容をとらえることは、なまやさしいものではなかった。まず授業そのものがもりあがりがすくなくなって、まことに地味なものになりやすく、何かしらもの足りなさを感じたときもあった。しかしひとりひとりの子どもを深くみつめ、認知の過程がわりあいはっきりしたことは、大きな収かくであったように思われる。

この研究を推進するために、金沢大学教育学部各研究室の先生方の直接的な指導をいただき、特に水越敏行先生には、具体的な教えをうけたことに対し、厚くお礼申しあげたい。

昭和48年5月29日

金沢大学教育学部付属小学校長

桐　元　武　一